

どこで場面を切って、次の場面につなげるか。だげど、とってつけたような、パスツと切ってつなげるようなやり方ではなく、つなぎ目に何かを残すというやり方。

いろいろなやり方があるんですけど、例えば前の場面に次の場面に関連付けて広げていくという映画の手法は言葉でもできます。最後の言葉に似たようなニュアンスをもった言葉を次の文に入れるんです。

**代** 先生、よくそれをやってらっしゃいますね。

**丸** はい。そういう手法がいろいろある。言葉というのは所詮道具ですから、使いこなさないとだめです。**代** そうでなければ、言葉になりませんか。

**丸** ええ、なりません。才能の部分は、本人にも、まわりにも絶対にタッチできないんです。これはもうどうしようもない。磨けるのはスキルの部分です。それによって才能が出てくる。才能を引き出すことが大事なんです。

だけど、大半の小説家はこれを全く怠っています。心の命ずるままに書いたんだから文句あるかと居直ってしまっている。だから、全然先に進まないんです。カメラマンがいろんなレンズを使うように、小説家もいろんな文体、いろんな言葉を用いないと表現の幅が広がってこないんです。広がらないまま才能もしぼんでしまう。

明治の近代文学が、まあまあスタートラインを切ったにもかかわらず、夏目漱石が最高で、あとはほむばっかりみたいな結果になったのも、それにあったんです。それは西洋文学にも言えます。誕生してから何千年も経っているのに、いまだに真の文学の鉦脈と

いうものに手を出せていません。

『白鯨』だけが、ややそれに近い鉦脈だったんです。メルヴィルは、最初は大家娯楽小説作家ですからね。いわゆる海洋冒険小説でかなり売れて、途中で嫌気がさしたんでしょうね。

売れなくてもいいと思って書いたのが『白鯨』なんです。ところが、娯楽小説を長年書いていたからその癖が抜けない。

『白鯨物語』で超訳をやったわかったんです。アラが

後の盛り上げなきゃいけない部分でへとへとに疲れた。俺は全部組み立て直して、テーマ性をはっきりさせて書いたんですけど。そういう意味で、いい勉強になった。

掘っているんです。その鉦脈はもう尽きてしまった。つまり愛と優しさのナルシズムの世界ですね。

ナルシズムを俺は否定しますけど、ナルシズムというのは本当はすごくレベルの高いところにあるんです。

それを三島由紀夫とかああいう人たちが、安っぽい、大正時代の少女趣味みたいな掘り方をしたもんですから、あの程度で終わってしまった。だけど、ちゃんとしたナルシズムを掘るというのもできるんです。ただし、その鉦脈を掘るにはすごいドリルが必要。

すごいドリルというのは、硬質な文体のことです。それを身につけるには、真剣にやっつて最低で五年かかります。お金にならないト

掘っているんです。すると井伏鱒二が、さんざんもったいつけて何を言うかと思つたら、「そのうち書けるよ、きみ」って。

このアホどもは、って思つたね。要するに、なぜ書けないかという、なんのことはない、書かなかったからですよ。ブランクがあったから。

俺は昔、無線通信士をやっていた、その訓練はモースだったんです。最初はトン、ツーってゆっくりしたスピードから学んで、そして、ちよつとずつスピードを上げていく。しまいにものすごい早さで打てるようになるんだけど、このときに自分の実力以上に早く打つと、手崩れという現象が起きるんです。

手崩れというのは、言葉

レーニングをさんざんしてようやく、言葉の効果や組み合わせ、それがすばつと出てくるようになる。それでも十分ではないんです。私は今でも勉強中です。

眼力は一度ついたら落ちません。ところが、書く腕というのは勉強している間は上がりますが、一週間サボるとすぐに落ちる。**代** それで、普通の人はわからないところですね。**丸** 書き手もわかっていません。

開高健が昔、NHKのドキュメンタリーで、書けなくなつたという愚痴をお師匠さんの井伏鱒二のところへ行つてこぼすところがありました。開高健が情けないことに、「最近、僕は書けなくなつてしまった」つ

て言うんです。すると井伏鱒二が、さんざんもったいつけて何を言うかと思つたら、「そのうち書けるよ、きみ」って。

このアホどもは、って思つたね。要するに、なぜ書けないかという、なんのことはない、書かなかったからですよ。ブランクがあったから。

俺は昔、無線通信士をやっていた、その訓練はモースだったんです。最初はトン、ツーってゆっくりしたスピードから学んで、そして、ちよつとずつスピードを上げていく。しまいにものすごい早さで打てるようになるんだけど、このときに自分の実力以上に早く打つと、手崩れという現象が起きるんです。

手崩れというのは、言葉

で言つたら「どもり」です。トン・ツーと打つたつもりが、トト・ツーになる。これに陥ると、もう打てなくなる。ここから回復するのは簡単で、最初のスピードに戻すしかない。ところが、面子があるから、俺は今ままであんなに早く打つていたのに、今更素人と同じ段階に戻れるか、みたいな。これも、作家がみんなそう思つちゃうんです。

同じ作品は二度と書かない

なるほど。今、全集の編集作業に取り組んでいますが、「争いの樹の下で」を読み終えて、「いつか海の底に」に移っているわけですが、文体を含めた両者の違いというのは、先生は

う。それから、俺は同じ事を二度とすまいという思いでいつも書くんです。一つの作品を書くとき、次の全く別の世界が見えてくる。

実際の山だつたら、頂に立ったかどうか一目瞭然です。ところが、文学の山というのは、自分がその山の頂に立ったかどうかかわからない。つまり、五合目で自分は山頂に立っている気になる場合もあるんです。そういうやつは必ず、また同じ山を登ります。日本の文学や外国の文学でこれをやっているやつは大勢います。山頂に立ったと思込んで、また同じ山を登っている。それで、また五合目で下りてしまう。山頂に立ったという自覚を持つには、自分に対する疑問を強



日本アルプスの山並み

く持つことです。ここは本当に山頂なのかと。

山頂に立ったという証はどこにあるのか。あるとき、俺はそれに気付いたんです。全く違う山が見えるんです。これで、とりあえず一つの山頂に立ったなとわかつて、次は別の山に登ろうと思った。

ここで間違えてはいけません。その次の山を目指すと、またふもとから素人と同じやり方で登らなければいけないということ。山を見上げたときに、あまりの高さに震え上がることもありません。だけど、冷静に見つめると、ルートがわかってくる。時間をかけてゆっくり登れば、立てるなどという自信がある。

知り合いの登山家に言われたことがあります。「感性なんていう言葉は簡単に口にするな。感性というのは、絶壁にしがみついている右へ行くか左に行くか、命がけの選択を迫られたときに言うもんだ」と。それは本当だと思った。芸術畑の人は簡単に感性とか

んとか使いますけど、そのぐらい厳しいもんだと、そのときにわかつた。

**代** 先生の取り組み方を見ていると、本当に命がけですものね。これがなぜ、日本人にもっと理解されないのかと僕は非常に不満で、先生の作品こそが、フィクションという世界の本道にあるものじゃないですか。

**丸** 日本人というのは自分を持つていないんです。持たないようにして生きていくというか。読者も自分を持つていない。

**代** 本当にそうですか。

**丸** それは、遺伝子に組み込まれている節があつて、自分がないから、誰かがお墨付きをくれたものにしかならず、手を出さない。「俺はこれが好きなんだ」ということ

がなかなか出せない。有名なヨーロッパのクラシック演奏家が来たときに、有名だからという理由で、ものすごく聴衆が集まる。すごいギャラをもらって日本に来る。向こうではそんなにギャラをもらってないんですけどね。

そのうちに、この聴衆はわかつてないなど見抜かれて、手抜き演奏をされるんです。ピアノなんてミス

ボーってやって、ますます紙められて、いいカモにされるというのが実態なんです。芸術に一番不向きな国民なのかもしれません。

【後記】

前回の航海日誌に引き続き、二回にわたってお送りした本インタビューは二〇一七年十月に行われたものです。実は今年五月、弊社一同で長野県の丸山先生のご自宅へお伺いした。今回掲載した写真は、そのときに撮影したものである。

弊社代表と担当編集者以外は皆、初対面であり、緊張と喜びと多少の恐れ(?)をもってその日を迎えた。丸山健二先生と言えは「強面で人嫌い、気難しい」といった言葉を思い浮かべる人が多いかもしれない。だが、実際にお会いした先生は、人嫌いどころか誰にでもざつとばらんで、温かく面倒見のよい「親分」といった肌合いの方だった。「豪放」「反逆児」「異端」といった、これまで世間が勝手に作り出したイメージからか、食事では骨付き肉に豪快にかじりつくタイプかと思いきや、サプリメントは欠かさず摂られるそう

で、「俺はサプリには詳しいんだ」と一言。そんなチャームポイントが意外な一面に思わず顔がほころんだ。今回の航海日誌からは、今年の長野訪問でのインタビューを掲載予定。これまであまり知られてこなかった「丸山健二の顔」をお伝えしていきたい。どうぞお楽しみに。

(編集 白幡和美)



丸山健二先生（前列中央）、装丁を担当する寄藤文平氏（前列左）と鈴木千佳子氏（前列右）。後列は柏船舎代表山本光伸（後列右端）と社員一同。丸山先生のご自宅のテラスで撮影。（2018年5月）